

いた。電話対応において効率的な情報収集を行うため相談内容の実態を調査し、その結果を基に「電話対応患者・予約外患者状態把握シート」(以下患者対応シート)を作成するに至った。患者対応シートを活用し、評価したので報告する。【方法】 外科外来看護師が対応した電話件数・内容を1ヵ月間調査し、患者対応シートを作成。3ヵ月間使用後、外来看護師・医師にアンケート調査し使用状況を分析した。【結果】 電話件数は129件であり、その半数を消化器外科の患者が占めていた。患者対応シートの使用により、電話対応において情報収集がスムーズになり負担感が軽減された。【考察】 消化器外科患者は高齢者が多数を占め、セルフケアが確立していない患者が多い。地域での生活を支援していくには電話相談は重要であり、効率的な情報収集能力が求められる。【結語】 患者対応シートを活用し情報を整理する事で、統一した情報を医師へ確実に伝達できる。

3. 重症皮膚障害をきたした患者のセルフケア支援

ーセルフケア理論を用いてー

角田美登里, 楯 麻耶, 斉藤 由美

田村喜美子, 今井 洋子, 六本木京子

(前橋赤十字病院 外来化学療法室)

大腸がん治療薬 EGFR 阻害薬の大きな副作用として皮膚障害がある。この皮膚障害と治療効果は相関関係にあるため、患者だけでなく医療者も、皮膚障害があっても仕方ないものと先入観をもってしまう傾向にある。しかし、皮膚障害はボディイメージの変容により社会的苦痛、心理的苦痛をもたらす、闘病意欲をも低下させてしまう危険性がある。

また、近年、化学療法の場合は外来へと移行し、患者は自身でセルフケアを行ないながら治療をしていかなければならないため、看護師は患者のセルフケア能力を高め支援をする必要がある。

今回、再発大腸がん化学療法により、重度の皮膚障害をきたした患者と関わる機会を得た。患者は、副作用による爪囲炎のため、皮膚障害に対するセルフケアが困難な状況にあること、保清に対する意識が薄いことで悪循環をきたしていた。セルフケア理論を用いて患者・家族に介入を行った結果、皮膚障害は軽減し、患者のセルフケア能力を高めることができたため報告する。

4. 地域がんサロンの活動報告

～「地域がんサロンぐんま」一年の歩み～

安井 鈴江 (地域がんサロンぐんま・

群馬県がんピアサポーター)

【はじめに】 「地域がんサロンぐんま」は、2014年4月に高崎・前橋で第一回のサロンが開催され、12月には太田にもサロンを開設しました。今では、リピーターの方を含め、多くのがん患者やそのご家族が来られ「地域に根差したがん

サロン」として歩みだしています。群馬県がんピアサポーター養成研修会修了者の有志と賛助会員が、ボランティアとして毎月1回開催しており、すべてを自分たちの会費で運営しています。【活動内容】 「がんの悩みや不安、一人で抱えず話してみませんか？」同じがんを経験したものとして、患者さんやご家族の心に寄り添うことが、地域がんサロンの主な目的です。訪れた方が少しでも穏やかな時間を過ごせるように、『おもてなしの心』を大切に、会場作りを心掛けています。サロンでは始めに、必ず「お互いのマナーと思いやりのルールについて」を読み、確認します。大人数のサロンでも患者さんが自分の悩みを十分話せるように、自己紹介の後はコーヒータイムを長く取り、ピアサポーターも加わり、少人数で和やかな会話が進んでいきます。また、サロン直後に『ふりかえり』の時間をもち、患者さんへの対応や、それぞれが抱えている状況について共有し、次のサロン時に活かします。サロンに来られる患者さんの大半は大変厳しい状況の患者さんで、「いきなり余命宣告された方」、「もう使える抗がん剤がない」という方々もいます。自分の気持ちをどのように整理したらよいかかわからず、初めて来られた時には暗く沈んだ表情ですが、同じような厳しい立場の方が、自分なりの対処法を見つけ、前向きに生きていこうとしているお話を聞いて、自分なりの道を見出されています。さらに、次に参加された時には、新しく来られた方に優しく寄り添い励ますなど、次々に素晴らしい“ピアサポーター”が誕生しています。そして、次もサロンに来られるよう体調を整え、治療を頑張ると笑顔で帰って行かれます。尚、ピアサポーターのスキルアップ、そして、多くの方々に正しい情報をお届けするために、専門家の医師を招いて、ぴあサポぐんま主催で公開講座を開催しています(平成26年7月「人がひとを支えること」・11月「抗がん剤の基礎知識と副作用について」・平成27年2月「がんの痛みのコントロールと医療用麻薬の基礎知識」)。【おわりに】 厳しい治療中であれ、余命が後わずかとしても、「自分らしく生きること」「誰かの役に立つこと」が人の心を支えているということを、地域がんサロンの活動を通して学びました。参加者の笑顔を自分たちの喜びとし、これからも地域がんサロンを続けていきたいと思えます。

第2群 症状マネジメントにおけるチームアプローチ

座長：大草由美子 (沼田病院 総看護師長)

5. 当院におけるがん患者の口腔機能管理の現状と課題

西場 里香, 荒牧 恵子, 青山真由美

室井 裕美, 松本 静香

(桐生厚生総合病院 看護部)

【はじめに】 抗がん剤治療や放射線治療などにより粘膜炎が発症する。なかでも抗がん剤の使用では約40%の患者に粘膜炎が出現するとされている。そのため口腔ケアの重要